

尼君・僧都及び光による紫の姫君の育て方

望月郁子

内容

- 一 尼君・北山僧都の紫への期待とリード
- 二 光の紫の姫君の育て方（新手枕以前）

一 尼君・北山僧都の紫への期待とリード

『源氏物語』の女主人公、紫上の祖母尼君と北山の僧都による幼い紫の育て方は、結婚を夢見させず、従って対男性意識を持たせないという点で、当時の上層貴族の姫君教育に対して一線を画したものであった。⁽¹⁾ 尼君と僧都がそうしなければならぬ紫の特殊事情が問題である。手がかりとすべきは、まずは、若紫巻での僧都が光に言う言葉であろうが、問題が多く、論証はかなりむづかしい。

〔一〕（「それも女にてぞ」）北山の僧都の坊に招かれた光が、夕暮の垣間見が気に掛かって、「ここにもものしたまふは、

誰にか。尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」と聞く。それに対する僧都の答えを引用する。【内は僧都に対する光の反応である。(引用本文は新編日本古典文学全集『源氏物語』小学館刊による)】

「…故按察大納言は、世に亡くて久しくなりはべりぬれば、えしろしめさじかし。その北の方なむなにがしが姉妹にはべる。かの按察隠れて後、世を背きてはべるが、このごろわづらふことはべるにより、かく京にもまかでねば、頼もし所に籠もりてものしはべるなり」と聞こえたまふ。

【かの大納言の御むすめものし給ふと聞きたまへしは。すきずきしき方にはあらで、まめやかに聞こゆるなり」と推しあてにのたまへば、】「むすめただ一人はべりし。亡せてこの十余年にやなりはべりぬらん。故大納言、内裏に奉らむなどかしこういつきはべりしを、その本意のごとくもものしはべらで過ぎはべりにしかば、ただこの尼君ひとりもてあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿宮なむ忍びて語らひつきたまへりけるを、もとの北の方やむごとくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりはべりにし。もの思ひに病づくものと目に近く見たまへし」など申したまふ。

【さらば、その子なりけり、と思しあはせつ。親王の御筋にて、かの人にも通ひきこえたるにやといとどあはれに見まほし。人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて心のままに教へ生ほし立てて見ばや、と思す。

「いとあはれにものしたまふことかな。それはとどめたまふ形見もなきか」と、幼かりつる行く方の、なほたしかに知らまほしくて、問ひたまへば、【亡くなりはべりしほどにこそはべりしか。それも女にてぞ。それにつけてもの思ひのもよほしになむ、齡の末に思ひたまへ嘆きはべるめると聞こえたまふ。【さればよ、とおぼさる。】(若紫二一二〜二二

四頁 以下頁略)】

大体、女人禁制の寺で、僧都の坊に女性が居ること自体が尋常ではない。聖の加持を受けた後、岩屋を出て見渡した際に、僧都の坊を見下ろして供人達は、「かしこに女こそありけれ」「僧都は、よも、さやうには据へたまはじを」「いかなる人ならむ」と口々に言ふ（二〇一）であった。

上掲本文を検討する。光は夢に託けて「ここにもものしたまふは誰にか」と聞く。僧都は、光の意識の中にあるのが紫と見ながら、尼君の寺逗留の理由、尼君の子の故姫君の死、紫の誕生と語る。簡潔に語れば、紫の実父は兵部卿宮である、実母の故姫君は紫誕生と同時に亡くなった、尼君が世話をしている、それだけで答えたり得る。にもかかわらず、僧都の語りは、故姫君の病死の部分が詳細である。詳細に涉って深刻に語るのは、光相手に、そう言わなければならない必要が僧都にあるからであろう。

として、取り上げるべき本文は、一つは、紫の母君の死に関する僧都の記憶としての語り、「安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりはべりにし。もの思ひに病づくものと目に近く見たまへし」であり、今一つは、紫の誕生についての「それも女にてぞ」である。

「それも女にてぞ」は、男ならば問題はないが、女であることが大問題だという口吻がある。あるいは、紫が誕生した場所が女人禁制であるべき僧都の北山の寺であったのではないか。

となると、そうならなければならなかった事情説明が必要となる。

僧都は、「もとの北の方やむごとなくなるとして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりはべりにし。もの思ひに病づくものと目に近く見たまへし」という。兵部卿宮の北の方を「もとの北の方」というのは、僧都・尼君の意識では故姫君が「北の方」とされたことを示唆する。兵部卿宮がそう言っていたのかもしれない。「安からぬこと」は、北の方の筋からの圧力であるが、僧都は「安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひて亡くなりはべりにし」と、その脅

し・嫌がらせと、それをうけた故姫君の死に至った不安・恐怖・苦悩をかなり詳細に今でも記憶しているという。「もの思ひに病づくものと目に近く見たまへし」は、僧都が自ら母姫君の治療にあたり、その時のことが僧都の記憶にはっきり残っていることをいう。よくよくのことであつたらしい。

思うに、紫の母姫君は、故父按察大納言の邸で母尼君に守られて、安心して出産することができず、尼君共々僧都の寺にかくまわれる以外に身の安全が保障されない、北の方の筋から、そういう圧力がかけられたのではないか。

物語に類例を求めると、夕顔が想起される。夕顔は、故父三位の中将の邸で子供（後の玉鬘）と共に暮らして当然であるのに、夕顔の花咲く五条の家に隠れて暮らしていた。頭中将の正妻右大臣の四の君が圧力をかけたことは、雨夜の品定めで「この見たまふるわたりより、情なくうたてあることをなん、さるたよりありてかすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか（帚木 八一〜八二）」と頭中将が語る。（とすれば、帚木巻・夕顔巻が若紫巻の一つの伏線となる。なお、兵部卿宮の北の方は、右大臣の次女ではなかったか。）

紫の母君の死についての僧都の話が、光相手にしては詳細に入りすぎる観があるのは、それが、紫の誕生の特異性と切り離せない事実であつた、と見れば一つの説明にはなる。

誰にでもこんな話をする僧都でもあるまい。光にそこまで打ち明けて語るところに、僧都の光に対する信頼と期待を讀むべきであろう。

僧都と尼君が、誕生した故姫君の忘れ形見紫のあるべき将来をどう見通すかは、誕生の特異性と切り離せない。

尼君にしてみれば、夫大納言と共に入内をめざして故姫君を育てたが、「十ばかり（二〇八）」になり、これからいよいよという時点で、大納言が死に、入内の夢は消え去つた。兵部卿宮が通い懐妊に至つた果てが上掲の僧都の言葉通りであつた。垣間見た光の目に「ただ人と見えぬ（二〇六）」という血筋の母であっても、強力な後見者を持たない限り、娘の

悲劇は回避できないと身に染みて体験した尼君である。男に愛されれば、懐妊が悲劇の発端となる。一方、子供は必ず往生のほだしになる。忘れ形見の紫には、故姫君の二の舞をさせてはならない。現世ではなく来世をこそ頼むべきだ。結婚を夢見させず、仏の加護を享けることのできる心の清らかな人間に育てる以外にはない、とあって自然であろう。

「12」〔たはぶれにても御覧じがたくや〕 僧都と光との会話はさらに続く。

【あやしきことなれど、幼き御後見に思すべく聞こえたまひてんや。思ふ心ありて、行きかかづらふ方もはべりながら、世に心のしまぬにやあらん、独り住みにてのみなむ。まだ似げなきほどと、常の人に思しなずらへて、はしたなくや」などのたまへば、】「いとうれしかるべき仰せ言なるを、まだむげにいけなきほどにはべるめれば、戯れにても御覧じがたくや。そもそも女は、人にもてなされて大人にもなりたまふものなれば、くはしくはえとり申さず、かの祖母に語らひはべりて聞こえさせむ」とすくよかに言ひて、ものごわきさましたまへれば、【若き御心には恥づかしくて、えよくも聞こえたまはず。】「阿弥陀仏ものしたまふ堂に、することはべるころになむ。初夜いまだ勤めはべらず。過ぐしてさぶらはむ」とて、上りたまひぬ。(二二四)

光は、紫の姫君の御後見になりたい、尼君の許しをと僧都に頼む。僧都の反応は難解である。先刻、紫の年令を結婚可能な「十余年にやなりはべりぬらん」と言いながら、「戯れにても御覧じがたくや。」という。筆者は「紫上の実年令」⁽¹⁾において、「戯れにても御覧じがたくや」は、光が結婚したくても出来ないのではの意で、後の新手枕での紫による光拒否の伏線であって、結婚を夢見させないやうに紫を育てていることの表明であると見た。本文の細かな検討考察が残っている。僧都のその言い方は「すくよか(単刀直入)」であり、「ものごわきさま(硬く強ばった表情)」である。これを言って僧都は「初夜いまだ勤め侍らず」と座を立つ。僧都は初夜の時刻が過ぎているのを承知で光に「戯れにても御覧じがたくや」と告げた。これだけは光に今言っておかなければならないと僧都は意識し、光に釘をさしたのであった。

「13」(紫の出産拒否の志向) 僧都がこう釘をさせるのは、紫(当時八歳)が出産拒否を決めており、その決意に揺らぎがないという自信を僧都が持てているからでもあろう。八歳にしてそこに至るには、尼君の了解を得た上での、僧都のリードが関わっている可能性がありそうだ。

紫が女人禁制の北山の寺で誕生したとすれば、僧都にとって紫は仏から授かった女人以外のなにもでもあるまい。僧都の寺は「阿弥陀仏ものしたまふ堂」が信仰の中心であるらしい。阿弥陀信仰は浄土経の世界である。浄土経世界での女人といえば、釈迦から『観無量寿経』を授かった、『女人往生』の元祖とも言うべき韋提希夫人いだいけふにんが存在する。末世の日本において、極楽の莊嚴を人々に観想させ、衆生を往生に導く、日本の韋提希夫人を僧都が紫に期し、それをめざして尼君ともども僧都が紫を育ててきたのではないか。

として、問題は、八歳にして紫が「戯れにても御覧じがたくや」に至っている根拠である。強固な後見のない女性の懐妊が悲劇の発端になるとか、実子が往生のほだしになるとかは、生活経験を重ねて判ることである。そうしたことを理由に八歳の子供が自分の一生を決断できるとは考えにくい。単純に見れば、紫は母を知らない。物心つく頃から、母は出産によって亡くなったと聞かされ、出産に対する恐れは強かったであろう。それに加えて、推測の域を出ないが、仮に僧都が幼い紫に『観無量寿経』が大切な経だと教え込み、内容を話して聞かせたとすると、冒頭部分で、韋提希の実子、阿闍世の悪ぶり―父王を幽閉して殺そうとし、王を救おおとする韋提希をも殺害しようとするくだり―を知ることになる。韋提希は自分が阿闍世を産んだことを後悔して釈迦に訴える。⁽²⁾ そういう話を聞けば、幼い子でも子供を産むのが恐ろしいとなり、韋提希を模範とするにしても子供は決してつくらないと、出産拒否になって不自然ではあるまい。

一方、尼君は、当時の上層貴族の姫君の育て方が、氣位を高く持たせ、異性に対する警戒心を強調し、周囲にかしづかれ過ぎる余りに、生き生きとした天真爛漫さ、のびのびとした意欲旺盛さ、自己処理能力といった、人間としてのより基

本的なものを阻碍しすぎるのが理解できていたであろう。孫の紫を育てるのに、結婚を夢見させず、異性に対して必要以上の警戒心を持たせず、より自然な育て方を尼君は実践してきた。

「二四」(僧都の光への期待と覚悟) 尼君も僧都も、紫の後見者は、是が非でも必要であった。光の北山訪問は、僧都側には、紫の後見者決定の絶好のチャンスとなった。僧都は、紫の年令が結婚適齢期であると言い、帰京に際しては「優曇華の花待ち得たる心地して」と、よくも持ち上げたと思われる歌を詠み、光に法華経を引用した見事な返答を言わせ、聖徳太子より伝来の数珠を護りとして授けた。(以下、旧稿「心ざしおかれたる極楽の曼陀羅」(二松学舎大学人文論叢第七十一輯)の「三」と重複する部分を含むが、旧稿の「三」を排除する。)

「僧都、聖徳太子の百済より得たまへりける金剛子の数珠の玉の装束したる、やがてその国より入れたる箱の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに御薬ども入れて、藤桜などにつけて、所につけたる御贈物ども捧げてたてまつりたまふ。(二二二)」

聖徳太子の加護を光にという僧都の光への力入れである。末世の闇を照らす光に聖徳太子を重ねたい僧都であるが、意識の底に光と紫の姫君の極楽往生をという僧都の願いが籠められているのではないか。

紫は、死後、「心ざしおかれたる極楽の曼陀羅」と「経などもあまた」を残した(幻五四〇)。△極楽の曼陀羅▽の先例、中宮寺の「天寿国曼陀羅繡帳」は七世紀の作で、聖徳太子没後、その妃多至波奈大女郎が推古帝に、太子が往生したと考えられる天寿国の状を描いて、太子を偲びたいと願い出て作られたという(『国史大辞典』の「中宮寺」の項)。紫は、自製の曼陀羅のことを生前光にうちあけなかった。紫に先立たれた光は「なにがし僧都(北山の僧都の後継者か)みなその心くはしく聞きおきたなれば…」と夕霧に語って、当の曼陀羅を紫の一周忌の供養とした。紫の「心ざしおかれたる極楽の曼陀羅」に、その源泉としての「天寿国曼陀羅繡帳」と僧都のリードが感じられてならない。(なお、源氏物語の作者が

「天寿国曼陀羅繡帳」を知っていたとする史的根拠は管見に入らないが、若紫の巻の当該部分が作者知見の証拠にならないであろうか。

京に帰る光の一行を見送って僧都は、

「あはれ、何の契りにて、かかる御さまながら、いとむつかしき日本の末の世に生まれたまへらむと見るに、いとなむ悲しきとて目おし拭ひたまふ。(二二四)」

僧都には、光が闇に向う末世を照らす光であり、姫君を救う聖と見えただか。末世到来を半世紀足らずの先に控えた当時の人々の、末世の闇―宇治十帖の暗さがそれを示唆する―に対する恐怖は想像を絶するものであったであろう。末世に入つて後、「世は末世と言えども日月未だ地に落ちたまはず」と言える中世の人々とは深刻さが全く違つたと見なければなるまい。

若紫の巻での紫の実年令は八歳である。僧都が光に言った紫の年令「十余年にや」は、光を紫と結びつける為の△妄語▽である。僧都が△妄語▽を口にするには、それなりの覚悟―地獄落ちの覚悟―がなければならぬ。理想の顕現化のためには自分を犠牲にする例に、桐壺帝の「おのづから犯しありければ(明石二二九)・明石入道の別れの言葉「煙ともならむ夕まで、若君の御事をなむ、六時の勤めにもなほ心きたなくうちませはべりぬべき(松風四〇六)」がある。当該の僧都の△妄語▽も自らの極限への迫込みである。光を見送つての僧都の「目おし拭ひたまふ」が僧都の苦悩の顕現である。物語り上の僧都の役割は、桐壺帝・明石入道と並んで、極めて重いと見なければならぬ。

光にしてみれば、僧都に認められている自信は十分に持てた。尼君が紫の実年令を守って直接の交際を許さないのが、尼君生存中、光には理解できなかった。僧都を信じ切っている光は、僧都の「戯れにても御覧じがたくや」を難解であるが重要な発言として心にしっかり留めたであろう。

「15」(光に対する紫の意識) 肝心の紫であるが、紫が初めて光を見たのは光が北山から帰京しようとする場面であった。

「この若君、幼心地に、めでたき人かなと見たまひて、「宮の御ありさまよりもまさりたまへるかな」などのたまふ。」さ
らば、かの人の御子になりておはしませよ」と聞こゆれば、うちうなづきて、いとよう(理想的)ありなむ、と思した
り。雛遊びにも、絵描いたまふにも、源氏の君と作り出でて、きよらなる衣着せかしづきたまふ。(二三四〜二二五)
以後、新手枕に至るまで、紫の意識のなかの光は「のちの親」であった。「さらばかの人の御子になりておはしませよ」と
言ったのは、少納言乳母であろう。乳母の機転が紫を光に近付けるかに見えるが、乳母独自の機転というより、僧都から
の指示が大きかったのではないか。

二 光の紫の姫君の育て方(新手枕以前)

「11」(紫を二条院へ迎える) 尼君死後、京の邸に紫を訪ね、いわゆる疑似結婚に至った光は、紫の実年令が社会的に
男女の交際が可能な十歳に達していないことを知った。通うことができないからには、極秘裡に二条院へ迎えるほかはな
い。実父兵部卿宮の先手をうって光は、突如、姫君を連れ出しに行く。乳母の少納言一人が付き添って、二条院に迎える。
光は、西の対を姫君の部屋とし、御帳・屏風・寝具を運びこませて休み、東の対の女童(遊び相手)四人を西の対に來
させ、乳母には「人なくてあしかめるを、さるべき人々、夕づけてこそは迎へさせたまはめ(二五七)」と命じ、「をかし
き絵、遊び物ども取りに遣はして見せたてまつり、御心につくことどもをしたまふ。」

「何心なくうち笑みなどしてゐたまへるがいとつくしきに、我もうち笑まれて見たまふ。」
紫も光も「ウチ笑ム」と得心できた。光が東の対(光の部屋)に行っている間も、紫は端に出て庭・池・前栽などを観察

し「げにをかき所かなと思す。」(以上、第一日)

「二二」(光による紫の教育(手習い・絵・雛遊び))

「君は二三日内裏へも参りたまはで、この人をなつけ語らひきこえたまふ。やがて本にと思すにや、手習、絵などさまざまにかきつつ見せたてまつりたまふ。(二五八)」

光の関心は八才の紫の手習いにある。

これ以前、紫を十才に達していると見ていた光は、紫に一度ならず歌を贈ってきた。その経緯を一通り辿っておこう。
北山では、

「初草の若葉のうえを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬと聞こえたまひてむや(二二六)」と女房に取次を頼んだが、尼君の返歌のみ。

帰京の翌日、尼君への文に「中に小さくひき結びて、

面影は身をも離れず山桜心のかぎりとめて来しかど

夜の間の風もうしろめたくなむ(二二八)」と入れて贈った。尼君の返事には「：まだ難波津をだにはかばかしうつづけはべらざめれば、かひなくなむ。：(二二九)」と姫君は歌も未熟の上、続け書きもできないと言い、姫君自筆の返歌を拒否する。

二三日後、惟光を北山に行かせた。「御文にも、いとねむごろに書いたまひて、例の、中に「かの御放ち書きなむ、なほ見たまへほしき」とて、

あさか山あさくも人を思はぬになど山の井のかけ離るらむ(二三〇)」

「(尼君の)御返し、汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき(二三〇)」

「秋の末つ方（二三五）」京の邸に衰弱した尼君を見舞った光は、「…をりしも、あなたより来る音して、「上こそ。この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見たまはぬ…いさ、見しかば心地のあしさ慰みき、とのたまひしかばぞかし（二三八）」と言う姫君の声をはじめて聞く。その翌日、見舞いの文をおくり、

「例の小さくて、

いはけなき鶴の一声聞きしより葦間になづむ舟ぞえならぬ

同じ人によ」とことさら幼く書きなしたまへるも、いみじうをかしげなれば、やがて手本に、と人々聞こゆ。（二三八）」尼君重態で山寺へ行くと少納言からの返事。当時の社会常識上、女方にとっては、垣間見されている上、声を聞かれたとなれば、追い詰められたことになる。

尼君に、光の追込みの巧みさは十分通じていたであろうが、尼君止まりに終始撤したのは、姫君が八歳で男女の交際が社会的に許されないことに尽きるのであって、尼君は紫だけでなく光をも守っていたのである。

光は北山の垣間見を思い出し

「手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草（三三九）」
と偲ぶ。

姫君八歳と知った今、光は上述の尼君の対応を八歳の姫君のこととして反芻し、姫君の実力を試そうとしている。光が書き集めたものの中から、紫は

「武蔵野といへばかこたれぬ」と紫の紙に書いたまへる、墨つきのいとことなるを取りて見るたまへり。すこし小さくて、

ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを

とあり。(二五八―二五九)」

光に「いで君も書いたまへ」とうながされ、「まだようは書かず」と遠慮しながらも、「∴教へきこえむかし」を素直にうけて、「うちそばみて」書き、

「書きそこなひつ」と恥ぢて隠したまふを、せめて見たまへば、

かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん

と、いと若けれど、生ひ先見えてふくよかに書いたまへり。故尼君のにぞ似たりける。いまめかしき手本習ひたまはば、いとよう書いたまひてむと見たまふ。」

完全な及第である。姫君が最も知りたいのは、光の自分に対する心の底であろう。光の手習いの中から、それがうかがえそうな一枚を取り上げている。光の「ねは見ねど」の歌は、姫君が「草のゆかり」であり、その草は「露わけわぶる」と光が近付けない憧れの対象であり、光が「かこたれぬ」と言わざるをえない女性で、紙色の「紫」と結びつく(古今六帖の歌を知らなかったとは言いきれまい)。姫君はそこまで理解して、極めて率直に「かこつべきゆゑを」知りたい。私は「いかなる草のゆかり」なのでしようと、切り返している。これが光と紫との最初の歌の唱和である。八歳の紫の早熟ぶりである。「いかなる草のゆかりなるらん」は姫君の心に残ったであろう。(正解に至るのは何時のことか。父方の血筋に紙色の紫を重ねて、乳母に尋ねれば、見当は付いたかもしれない。)

筆跡が「故尼君のにぞ似たりける」は、尼君が姫君に手習いをしっかり躰けていたことを物語る。

物語は、これに続けて、

「雛など、わざと屋ども作りつづけて、もろともにあそびつつ、こよなきもの思ひの紛らはしなり。(二五九)」

とし、紫の二条院入り後の「二三日」の語りを結ぶ。「わざと屋ども作りつづけて」は、寝殿造りの正式な形式を整えるこ

とであり、雛遊びは、あるべき生活を習得する近道であったらしい。紫には光が直接それを教えた。(翌年正月の雛遊びは、紅葉賀三二〇～三二二・末摘花三〇五に詳しい。)

「二三」(後の親) 姫君の遊び相手の子供達もふえた。

「…君は、男君のおはせずなどしてさうざうしき夕暮などばかりぞ、尼君を恋ひきこえたまひて、うち泣きなどしたまへど、宮をばことに思ひ出できこえたまはず。…今はただこの後の親をいみじう睦びまつはしきこえたまふ。ものよりおはすれば、まづ出でむかひて、あはれにうち語らひ、御懐に入りゐて、いささかうとく恥づかしとも思ひたらず。さる方に、いみじくうたきわざなりけり。(二六一)」

光に対する姫君には異性への警戒心も媚もない。光は尼君の教育方針を尊重し、継承している。二条院でも、紫は、天真爛漫で、孤独に強く、めったに泣かない才気煥発な八歳の女の子である。そういう紫を、光は、

「…むすめなど、はた、かばかりになれば、心やすくうちふるまひ、隔てなきさまに臥し起きなどは、えしもすまじきを、これはいとさま変りたるかしづきぐさなり、と思いためり。(二六一～二六二)」
と、受けとめている。以上、若紫巻である。

「二四」(よろづの御事) 光が二条院に人を迎えたというニュースが左大臣家に入り、葵上は光に冷たい(紅葉賀三一六)。「幼き人は見つけたまふままに、いとよき心さま容貌にて、何心もなく睦れまとはしきこえたまふ。しばし殿の内の人にも誰と知らせじ、と思して、なほ離れたる対に御しつらひ二なくして、我も明け暮れ入りおはして、よろづの御事を教へきこえたまふ。手本書きて習はせなどしつ、ただほかなりける御むすめ迎へたまへらむやうにぞ思したる。(紅葉賀三二七)」

「よろづの御事を教へきこえたまふ。手本書きて習はせなどしつ」の中身が語られていない。「よろづの御事」とは、何

から何まで残る事無くの意であり、光が手本を書くものに絞るとして、特定は難しいが、例えば、『法華経』などの經典が含まれるのではないか。紫は晩年、法華経千部供養を二条院で催した。それを「いつのほどに、いとかくいろいろ思しまうけん、げに、石上の世々経たる御願にやとぞ見えたる（御法四九六）」と地の文はいう。尼君の読経の中で八歳まで育った紫は經典に馴染んでいて自然であろう。北山の僧都のリードも考えられる。光も信仰心は篤い。写経を本格的に始める際に、問題となるのは、毛筆書写の世界では、漢字の字体・字形が多様化しやすいことである。光が手本を書いて与え、写経を通して漢字教育もしたのではないか。

（母なき子持たらむ心地）

「政所、家司などをはじめ、ことにわかちて心もとなからず仕うまつらせたまふ。…姫君は、なほ時々思ひ出できこえたまふ時、尼君を恋ひきこえたまふをり多かり。君のおはするほどは、紛らはしたまふを、夜などは、時々こそとまりたまへ、ここかしこの御暇なくて、暮るれば出でたまふを、慕ひきこえたまふをりなどあるを、いとらうたく思ひきこえたまへり。二三日内裏にさぶらひ大殿にもおはするをりは、いといたく屈しなしたまへば、心苦しうて、母なき子持たらむ心地して、歩きも静心なくおぼえたまふ。僧都は、かくなむと聞きたまひて、あやしきものからうれしとなむ思ほしける。かの（故尼君の）御法事などしたまふにも、いかめしうとぶらひきこえたまへり。（紅葉賀三一七〜三一八）」光が女君方との交渉にもどり、夜の留守が多くなる。光がいないと姫君は不安になり、光は「母なき子持たらむ心地」になる。

北山の僧都は、尼君の死後、八歳の姫君を、特に人も付けず、京の邸に帰した。光の出方を読んのであったであろう。光に引き取られた姫君の実情を聞き、「あやしきものからうれし」と喜ぶ。

「少納言は、おぼえずをかしき世を見るかな、これも故尼上の、この御事を思して、御行ひにも祈りきこえたまひし仏の

御するしにやとおぼゆ。大殿いとやむごとなくおはし、ここかしこあまたかかづらひたまふをぞ、まことにおとなびたまはむほどは、むつかしきこともやとおぼえける。されど、かくとりわきたまへる御おぼえのほどは、いと頼もしげなりかし。(三一九～三二〇)」

故尼君の祈りを仏が納受し姫君を守っていると少納言は信じている。と同時に、正妻の葵の上を始めとする女君方が存在する中で、将来、姫君をどう守れるかを案じる。故尼君・僧都の姫君の育て方も、姫君の意識に結婚がないことも、この乳母は承知していると見てよいであろうが、ここでは何も語られていない。この乳母が僧都と連絡をとり、その指示を受けていたか。

「二五」(紫九歳) 年が明ける。

「古代の祖母君の御なごりにて、齒ぐるめもまだしかりけるを、ひきつくるはせたまへれば、眉のけぎやかになりたるもうつくしうきよらなり。：(光は) 例の、もろともに雛遊びしたまふ。(末摘花 三〇五)」

四月。光は桐壺帝の手に抱かれた藤壺腹の皇子を藤壺同席で、初めて見た後、珍しく、藤壺の返歌を手にし、心の動揺を抑え切れず、「例の、慰めには、西の対にぞ渡りたまふ。(紅葉賀 三三二)」二条院にいながらすぐに顔を見せない光に紫は「入りぬる磯のと口ずさびて口おほひ」をする。情況に即して古歌を使いこなせている。

(箏の琴を教える)

「掻き合はせばかり弾きて、さしやりたまへれば、え怨じはてずいとうつくしう弾きたまふ。小さき御ほどに、さしやりてゆしたまふ御手つきいとうつくしければ、らうたしと思して、笛吹き鳴らしつつ教へたまふ。いと聴くて、かたき調子どもを、ただ一わたりに習ひとりたまふ。おほかた、らうらうじくをかしき御心ばへを、思ひしことかなふと思す。保曾呂俱世利といふものは名は憎けれど、おもしろう吹きすましたまへるに、掻き合はせまだ若けれど、拍子違はず上

手めきたり。(三三二)

何でも出来る姫君を光は「思ひしことかなふと思す。」と、理想通りに育っていると自負する。その夜、予定されていた外出を、姫君が悲しむので光は取り止める。光にそうさせることもできる紫である。

光が二条院に人を迎えたことが世間に知れ、帝の耳にも入った。(三三四～三三五)

「二六」(紫十歳) 南殿の桜の宴が終わった。

「若君も心苦しければ、こしらへむと思して、二条院へおはしぬ。見るままに、いとうつくしげに生ひなりて、愛敬つき、らうらうじき心ばへいとなり。飽かぬところなう、わが御心のままに教へなさむと思すにかなひぬべし。男の御教へなれば、すこし人馴れたることや交じらむと思ふこそうしろめたけれ。日頃の御物語、御琴など教へ暮らして出でたまふを、例のと口惜しう思せど、今はいとようならはされて、わりなくは慕いまつはさず。(花宴 二六一)」

「飽かぬところなう、わが御心のままに教へなさむと思すにかなひぬべし」と、紫は光の理想通りに育った。昨年夏頃は、光の外出を寂しがったが、半年ほどのうちに変わってくる。当時女性の十歳は、そういう年令であったのであろう。

葵祭を光は紫と共に見物する。「人とあひ乗りて簾をだに上げたまはぬを、心やましう思ふ人多かり。(葵三〇)」と、光は紫の存在を世間に感知させる。

葵上が他界する。朝顔からの弔問の歌を得て、

「つれながら、さるべきをりをりのあはれを過ぐしたまはぬ、これこそかたみに情も見はつべきわざなれ、なほゆるぎつきよし過ぎて、人目に見ゆるばかりなるは、あまりの難も出で来けり、対の姫君をさは生ほしたてじ、と思す。(五八)」
紫の育て方として、「ゆるぎつきよし過ぎて、人目に見ゆるばかりなる」を光が警戒するところに、光がすでに、紫に「ゆるぎよし」を十分に身につけさせていることが窺える。左大臣家を出て二条院に帰る。

「姫君、いとうつくしうひきつくろひておはす。「久しかりつるほどに、いとこよなうこそおとなびたまひにけれ」とて、小さき御几帳ひき上げて見たてまつりたまへば、うち側みて恥ぢらひたまへる御さま飽かぬところなし。灯影の御かたはら目、頭つきなど、ただかの心尽くしきこゆる人に違ふところなくもなりゆくかな、と見たまふにいとうれし。(六八)」

「：紫のねにかよひける野辺の若草(若紫二三九)」は、その「ゆかり」ぶりを完成させた。

〔注〕

- (1) 望月郁子「紫上の実年令」平成十五年度中古文学会秋季大会における口頭発表
- (2) 「韋提希、見仏世尊、自絶瓔珞、举身投地、号泣向仏、白言世尊、我宿何罪、生此悪子。」「浄土三部経(下)」中村元・中島鏡正・紀野一義訳註 岩波文庫 46頁
- (3) 田中栄一郎「へうちゑむゝ考―源氏物語の場合―」『三松学舎大学論集 第四十六号』二〇〇三年三月